

# 不確実性管理における二分法的思考の調整効果

長谷川 晴也

現代社会では、社会構造の流動化や価値観の多様化、将来予測の困難さにより、人は自己や世界の秩序に対する確信を維持しにくい状況に頻繁に直面している。不確実性管理理論(UMT; Van den Bos & Lind, 2002)は、このような不確実性脅威が生じた際、人は心理的安定を回復するために、社会規範や文化的世界観といった一貫した枠組みに依拠し、それらを脅かす逸脱者に対して否定的反応を強めると仮定する。一方、物事を白黒・善悪といった二値で捉え、中間の可能性を排除しやすい二分法的思考(DTI; 押尾, 2009)は、曖昧さを回避し確実性を志向する認知傾向として、不確実性への対処様式と密接に関連すると考えられる。本研究は、日本人成人を対象に、不確実性脅威が社会的逸脱者への否定的感情を高めるかを検証するとともに、二分法的思考傾向がその過程をどのように調整するかを明らかにすることを目的とした。

実験1では、Yahoo!クラウドソーシングを通じて募集した成人233名を対象に、2(不確実性操作: 不確実性脅威/統制)×2(シナリオ: 逸脱/非逸脱)の被験者間計画を用いた。不確実性操作として、過去に不確実・不安を感じた出来事の想起課題を実施し、統制条件では最近視聴したテレビ番組について記述を求めた。操作チェックには、一時的なネガティブ感情状態を測定するPANAS日本語版(佐藤・安田, 2001)のネガティブ尺度(PANAS-NA)を用いた。続いて、電車内におけるマナー違反または配慮行動を描いたシナリオを提示し、登場人物に対する否定的感情を測定した。分析の結果、不確実性条件ではPANAS-NA得点が有意に高く、不確実性操作が情動を喚起していることが確認された。一方で、否定的感情に対する不確実性操作の主効果および不確実性×シナリオの交互作用はいずれも有意ではなかった。逸脱シナリオでは否定的感情が上限付近に集中しており、天井効果により条件差や個人差が検出されにくい可能性が示唆された。

実験2では、実験1で確認された天井効果を踏まえ、逸脱強度を中庸化した観光地ベンチ場面のシナリオを用いた。また、不確実性操作を実存的不安想起課題へと改良し、不確実性の質的側面にも着目した。成人253名を対象に同様の2×2計画で分析を行った結果、不確実性操作およびシナリオ条件の主効果はいずれも有意であったが、両者の交互作用は認められなかった。記述統計では、逸脱・非逸脱のいずれのシナリオにおいても統制条件の方が否定的感情が高い傾向が示され、当初の予測とは逆の方向性が観察された。二分法的思考傾向は両実験を通じて否定的感情を高める主効果を示した一方、不確実性操作やシナリオ条件との交互作用は有意ではなかった。

さらに実験2の補助的探索分析では、不確実性脅威条件下において、想起された不確実性のうち実存的不安が高いほど、逸脱シナリオに対する否定的感情が強まり、非逸脱シナリオでは否定的感情が弱まる交互作用が確認された。一方、情報不足的な不確実性では同様の効果は認められなかった。これらの結果から、不確実性管理過程においては、不確実性を一枚岩の概念として扱うのではなく、その質的側面を区別することの重要性が示唆される。総合すると、本研究は、日常的マナー違反を逸脱として扱う条件では、不確実性脅威が逸脱者への否定的感情を選択的に増幅するというUMTの予測は支持されないことを示した。その一方で、二分法的思考は状況依存的な調整変数というよりも、対人評価全般を硬直化させる基盤的特性として機能する可能性が示された。(社会心理学)